

訂正

P.7 L.6,8 【誤】『源氏物語の語り手—内発的文学史の試み—』
→【正】『物語の語り手—内発的文学史の試み—』

故吉岡 曠先生の学問と人

日本語日本文学科主任

諏訪 春雄

吉岡曠先生は平成十三年十二月二十九日午後零時五十五分、入院中の西東京市の田無病院で食道癌のためにお亡くなりになりました。享年七十一歳。

先生は平成十二年にも一度食道癌の手術をうけておられます。すぐに元気に復職され、かわらずお酒も召しあがっている先生をみて、私たちはすっかりお元氣になられたものと信じていたのですが……。

吉岡先生は平成十二年四月をもって、学習院大学日本語日本文学科を定年退職されました。

昭和三十四年に学習院大学文学部国文学科に助手としておつとめになり、昭和四十八年には専任講師になっておられます。助手時代からかぞえて四十二年、講師になられてからでも三十八年間の長期にわたって日本語日本文学科（はじめ国文学科）に教員として関係されたことになります。その間、平成九年から二年間は学科主任をつとめておられました。

吉岡先生は申しあげるまでもなく平安文学、ことに「源氏物語」の専門家として名が知られています。著書九冊のうち五冊までが「源氏物語」にかかわるものです。生生は、やはりながく本学の選任教授であられ、「源氏物語」の研究

究者として有名であつた松尾聡先生の教えをうけて、松尾先生の実証的な学風のもつとも忠実な継承者でした。そうした吉岡先生の学問をよくうかがうことのできる著作が平成六年に刊行された『源氏物語の本文批判』（笠間書院）です。諸本の異同を気の遠くなるような根気で比較検討され、もつとも信頼のできる「源氏物語」本文の再現を目指した労作です。その厳密さ、周到さが吉岡源氏学の真髄をよくしめしています。

こうした読みの厳密さで、「源氏物語」の文学性の解明と語り手の問題にせまった労作が昭和四十二年に刊行された『源氏物語論』（笠間書院）と平成八年に刊行された『源氏物語の語り手―内発的文学史の試み―』（笠間書院）でした。そこには注釈学的な厳格さで読みこまれた人物論や作品論が説得的な語り口で展開されています。その一つの到達点が語り手の自発的営みとしての文学史の構築をめざした後者の『源氏物語の語り手―内発的文学史の試み―』でした。この書からは、新しい研究分野の開発を目指す先生の若々しい心のたかぶりすら感じとることができます。

先生は昭和三十二年に国文学科を、三十四年に修士課程国文学専攻を修了しておられます。ちょうど、先生が国文学の若き研究者として歩みを開始されたころ、国文学の世界では歴史社会学とよばれる研究方法が猛威をふるっていました。下部構造が上部構造を決定するというマルクス文学理論の国文学版とでもみることで、歴史的、社会的な状況が文学の本質を決定するという機械的な主張でした。作品の精密な読みよりも、当時の社会状況の分析が先行する文学研究が量産されていました。

吉岡先生の学問の凄さは、そうした世の流行現象と無縁なことです。ひたすらに作品の語りかけてくる声に耳をかたむけ、そこから作品論、文学論を構築されています。先生の研究が時代を超えて生きのこる最大の理由であろうと思います。

先生はこよなく酒を愛され、酒とおなじくらいにテニスを愛されました。私は酒のお相手はとても酒量の点からつと

まりませんでした、テニスはよくご一緒させていただきました。

先生のテニスはきちんと講習をうけられた正統派で、きれいなフォームで打ちこんでこられました。ご自宅の近くのクラブ会員権を所持しておられ、週に一、二回はかよっておられました。私も卒業生などとともに何度かお邪魔させていただいたことがあります。

テニスで汗をかいたあと、武蔵野にせずむ夕陽にそまりながら、クラブのバーでビールのジョッキをかたむけて先生とともにすごした時間こそは、まさに至福の瞬間とよべるものでした。

史学科の金沢誠先生、フランス文学科の白井健三郎先生、日本語日本文学科の猪野謙二先生などという、いずれも今は鬼籍にはいられた、文学部のよき時代を体現された長老の先生方と、学習院女子大学、当時の女子短期大学のコートで白球を追いかけた記憶も、なつかしく鮮明です。

退官記念のご講演のあと、ご自慢のお孫さんをつれて研究室にお見えになられた先生に、お孫さんとペアーをくんでダブルスをするのもすぐですね、と申しあげたときのうれしそうな顔が眼にうかびます。

個性的な先生方の多かった日本語日本文学科の長い歴史のなかにあつて、いつも中庸を保たれ、声高に主張することなく、誤りのない舵取りの役割をつとめてこられた先生。先生はまた、学習院大学国語国文学会の責任者として、卒業生と学科とのつながりを堅固に保つ要のような存在でした。

先生と、ある時期、職場をともにすることのできた幸せをあらためて天に感謝している今日このごろです。

合掌。

(平成十四年一月末日)